

## 塗料から見た輸出漆器の受容について

加藤 寛

16世紀後半からヨーロッパへむけて輸出した漆器類には、宮殿などで使用するヨーロッパスタイルの家具(図1, 2), 家具以外の漆器(図3), そして18世紀に中国を経由地として輸出した中国スタイルの漆器がある(図4)。それらの漆器の表面は、金銀の蒔絵や螺鈿などの華やかな装飾がほどこされていた。現在、輸出漆器の装飾法や文様などのカテゴリーについて、日本やヨーロッパの専門家のあいだで研究が進みつつある。さらに、輸出漆器のコレクションについても興味深い発表がおこなわれている。本稿では、これら輸出漆器の装飾からはなれて、塗料の上から見たヨーロッパにおける日本漆器の受容について触れておきたい。

17~18世紀にかけて、ヨーロッパで使用されていたラッカーは、サンダーラックやコパールオイルなどの琥珀色の塗料が主流であった。サンダーラックは、低灌木の樹脂を高温で溶かした塗料である。ドイツのブランシュバイク市ではこれらの塗料のうち、石化した松脂を原料としたコパールオイルを使用して、さまざまな塗り物を生産していた。とくに、1757年にヨハンH.シュトプヴァッサー(Johann Heunrich Stobwasser)の発見した黒い塗料で塗った嗅煙草ケースは、ヨーロッパを代表する塗り物であった(図5)。この黒い塗料は、遅くとも1760年までにコロボフによってロシアまで運ばれ、フェドスキーノとして現在でも生産されている。東京国立博物館の後藤文子訳の『ブランシュバイクの漆工芸』<sup>1)</sup>の年表によれば、黒い家具をはじめて製作したのはフランス人ヨハン・クリストフ・レジュールであった(図6)。年表を引用すると次のとおりである。

- 1717 10月17日漆職人ヨハン・クリストフ・レジュールが新市民として居を定める。彼の漆家具の売行きは家具職人ギルドの依存で伸び悩む。
- 1732 一家は火事で全財産を失い、生活は困窮する。そのためガラス作りの親方ジークムント・シュトプヴァッサーは、台頭しつつあった漆工芸商人として金を稼がざるを得なくなった。
- 1740 息子ヨハン・ハインリッヒ誕生。息子は芸術的天分に恵まれており、15歳になると、当時ひじょうに需要の高かった漆工芸品をみずから制作したいと望むようになる。

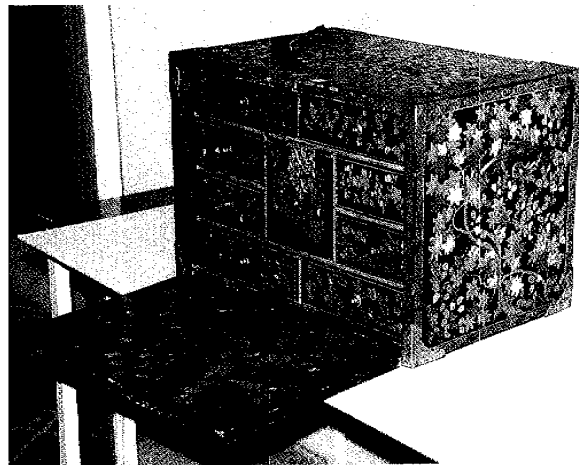


図1 花樹鳥獸蒔絵螺鈿箆筒 16世紀 ゴータ城博物館

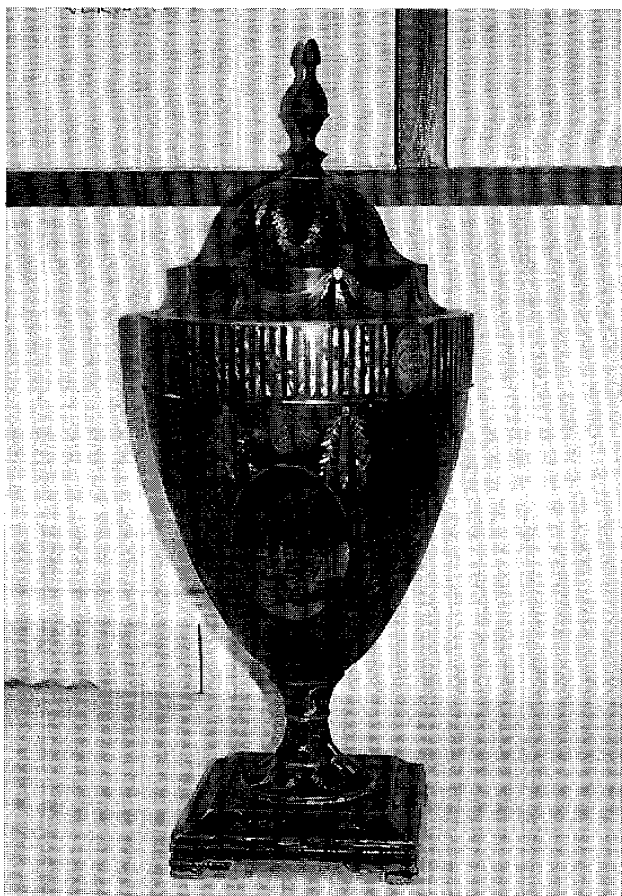


図2 蒔絵螺鈿ナイフボックス 19世紀 アシュモリアン美術館



図3 四季蒔絵棚 19世紀 ゴータ城博物館

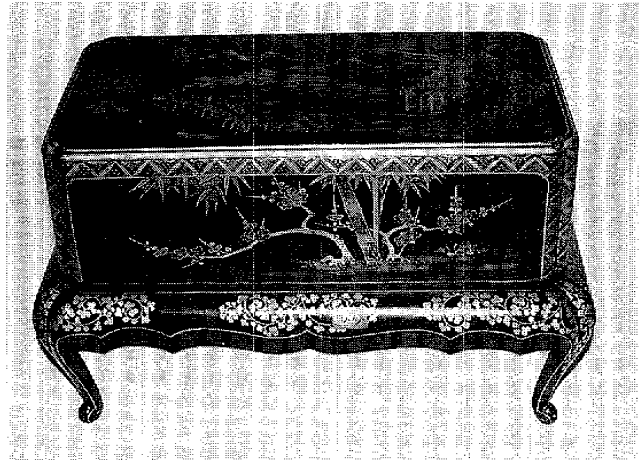


図4 梅竹風景香箱 18世紀 ゴータ城博物館

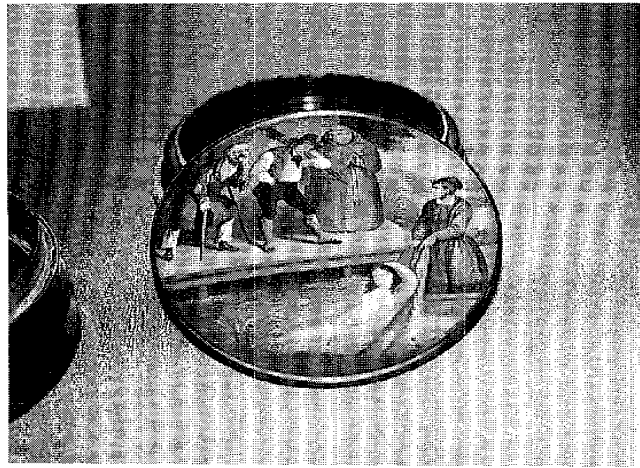


図5 彩画嗅ぎ煙草箱 18世紀 ブランシュバイク市立博物館

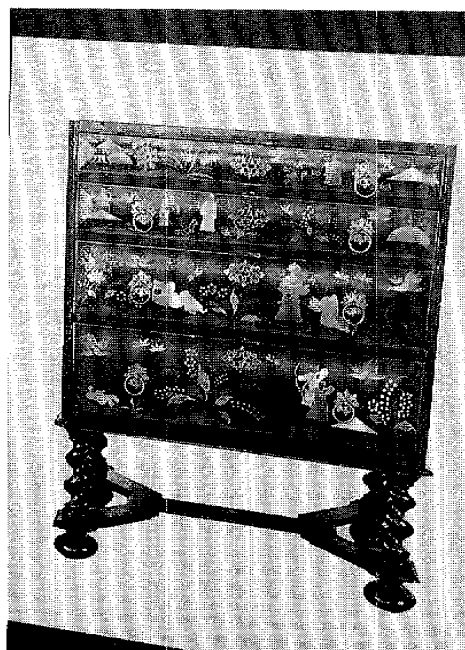


図6 彩画簞笥 18世紀 ブランシュバイク市立博物館

1757 二年間の試行錯誤を経て、ヨハン・ハインリッヒは漆制作のための「奥義 Arcanum」を発見する。彼は張り子で作った小箱や小容器、盆や盃に漆を塗り、絵付けを施した。

1763 シュトプヴァッサー一家はブランシュバイクへ移住。

1863 ベルリンで約 400 名の従業員が創立 100 周年を祝う。数年後、極東からの安価な輸入品のあおりですべての生産が停止される。

この記事のなかで、ヨハン・ハインリッヒが黒い塗料を発見した 18 世紀半ばのドイツでは、「台頭しつつあった」または「当時ひじょうに需要の高かった」など盛んにジャパニング<sup>2)</sup>がおこなわれていた。また、黒色塗料の開発で 100 年間ものあいだ塗装工場が営まれ、最晩期におこなわれた創立 100 年記念の祝賀を 400 人もの関係者で行っている。当時の黒い塗り物業界の規模が想像できる。さらに、シュトプヴァッサー工房閉鎖の原因が「極東からの安価な輸入品」であったことなど輸出漆器との関わりも大変興味深い。

ブランシュバイク市立博物館は、シュトプヴァッサーの発見した塗装法の素材、工程、作品を展示している。その展示に見られる黒色塗料の製作工程は次のとおりである。

- ① 石化した樹脂を 360℃ の高温で溶かし、リンシードオイル（亜麻仁油）の中に落としてコパールオイルを作る（図 7）。
- ② パルプ製（パピエマシェ）（図 8）の素地に、コパールオイルを 30 回（層）塗りかさねる。
- ③ 塗り上がったものを 100℃ の石製の炉の中に入れて数時間焼く（図 9）。すると、透明な塗料が真っ黒に変色する。

さらに、蓋表に細密画を描いてからコパールオイルを塗って仕上げる。こうして製造した直径約 12 cm の嗅煙草入れが、現在の金額に換算して約 35 万円で販売されたといわれている。特殊な製法で作られた黒い塗り物が、われわれ日本人には信じがたいほど高価に取り引きされていた。

ヨーロッパでの黒色家具の流行は、16 世紀にマダガスカル産のエボニー（黒檀）を輸入したことに始まる。東洋からやってきた黒い木材は当時のヨーロッパ人の目にどのように写ったのであろうか。黒一色のキャビネットに金属や色石などを象嵌した、イタリアもしくはフランス製の家具がヨーロッパ中で好まれるようになった。しかし、エボニーは密度の高い材木で、加工するために特殊な技術が必要で、家具の製作にわざわざインドから職人を招いて作らせなければならなかった。さらに、堅く重い家具は、いったん室内に設置すると、配置替えなどの移動に不便をきたすなどいくつかの問題があった。

では、なぜエボニーを家具に使用したのかを考えてみたい。18 世紀以前にヨーロッパで使われ



図 7 コパールオイル 18世紀 ブランシュバイク市立博物館

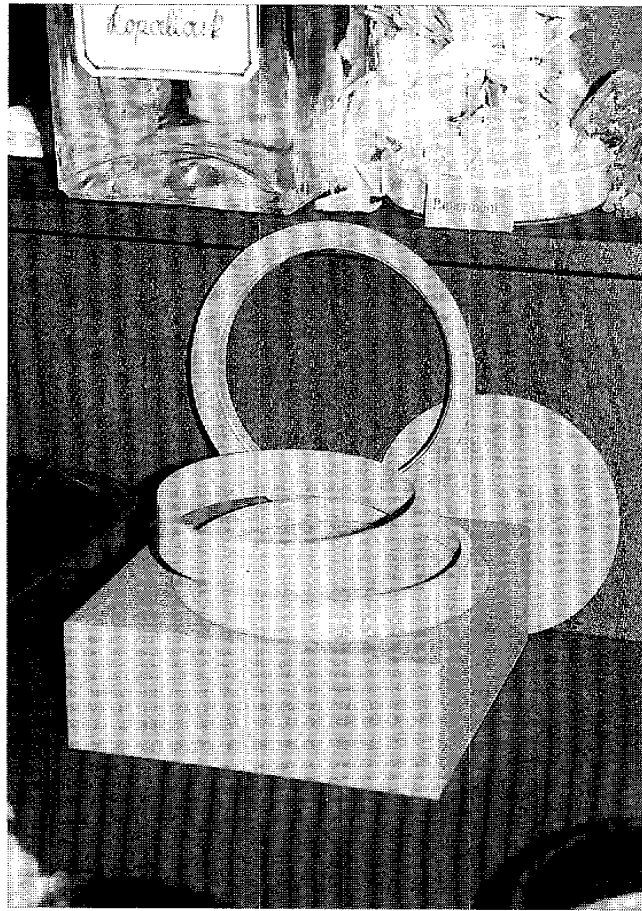


図 8 パピエマシェの素地 ブランシュバイク市立博物館

ていた塗料は、琥珀色の液体であったことはすでに述べた。これらの塗料の特徴は、顔料を加えてさまざまな色彩を作ることができることである。赤、青、白など発色の良い塗料を作りだせる。また、塗装表面が堅くつややかでひび割れをおこしにくい。つまり、高い発色性と表面の艶が当時の塗料の特徴であった。黒い塗料の場合はどのようであったのだろうか。黒い塗料を作るには、骨や角を焼いたボーン（ホーン）ブラック、象牙を焼いたアイボリーブラックそして蠟燭の煤（ランプブラック）などの色材をサンダーラックに練り込む。ホーンブラックは焼いたときには黒色であるが粉末にするとこげ茶色になる。また、煤を混入した塗料では塗った表面に艶がでない。アイボリーブラックは黒く艶のある塗料を作れるが、東洋から輸入した高価な象牙を焼いて粉末にしなくてはならない。もちろん、高価な象牙から作った黒い塗料で仕上げられているチェンバロなど、いくつかの例をあげることはできるが、一般的に他の色ほど簡単に入手できない色材であった。つまり、当時のヨーロッパには一般的に完全な黒色塗料が存在していなかったわけである。そのために、黒色の家具を作るにはエボニーなどの黒い木材が必要であった。16世紀の後半から輸入した日本の漆家具は、黒い塗料の上に東洋風の文様を蒔絵と螺鈿であらわしていた。エボニーよりも軽く持ち運びのできる漆器は、当時のヨーロッパ人にとって快適な家具であったと考えられる（図10）。

日本人にとって漆器が黒いのはあたりまえのことである。あまりに周知なことなので日本の漆器がヨーロッパ人によろこばれたのは、燦然と輝く金銀の蒔絵や螺鈿などの装飾だったと考えることが一般的であろう。東洋の漆器を選んだ理由が装飾だけであるならば、中国の朱色の漆器が

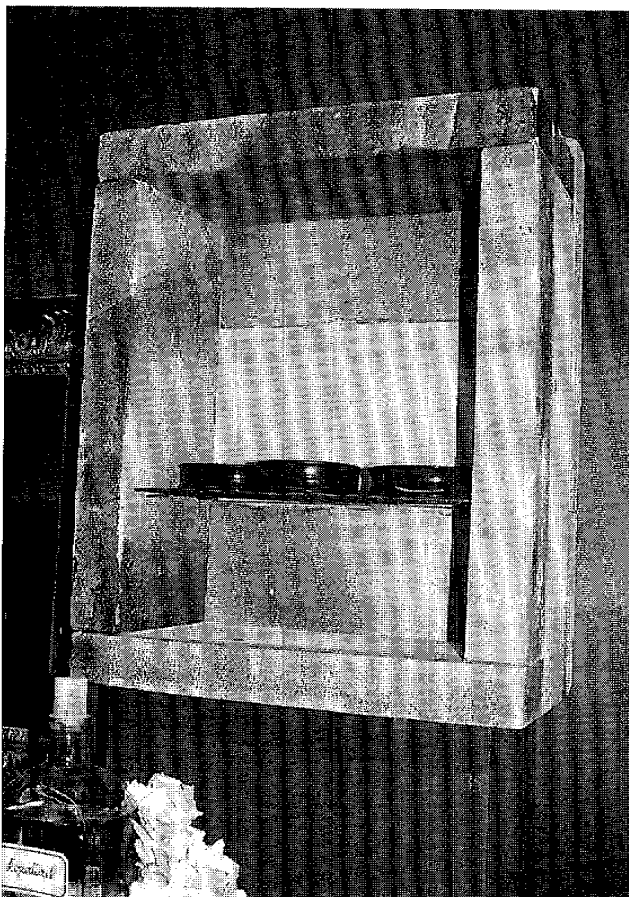


図9 煉瓦製の炉 ブランシュバイク市立博物館

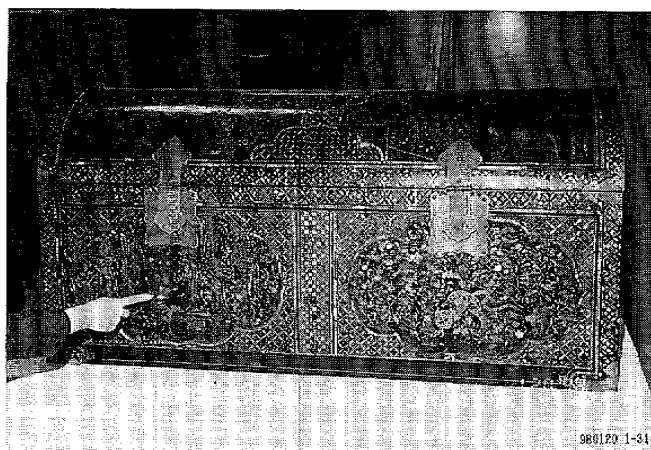


図10 花樹鳥獸蒔絵螺鈿洋櫃 16世紀 ギメ美術館

選ばれたとしてもおかしくない。また、シュトプヴァッサーの事跡が高く評価されたのも完全な黒色を出し得たからにほかならない。

17世紀に盛んに行われるジャパニングも、単に東洋風の文様を金色の塗料で真似するだけではなく、黒い塗料そのものを作り上げることであった。1688年にジョン・ストーカーとジョージ・パーカーが刊行した『A Treatise Japaning and Varnishing』<sup>3)</sup>の序文にも、東洋からきた黒い

塗料への賛美が記されている。しかも、彼らがテキストに収録した東洋風の図案は、家具職人のジャパニングの中で生まれてきたヨーロッパ製の図案集である。テキストの内容からも、あこがれていたのは東洋風の装飾を真似ることよりもいかに漆黒の家具を作るかということであったことが理解されよう。

18世紀半ば、ヨーロッパ音楽の形式が大きく変わることはよく知られている。バロック時代のホモフォニーからポリフォニーへの移行は、演奏楽器の構造や演奏形態をも変化させた。バロック音楽の中心的な楽器であったチェンバロからピアノへの移行もそのひとつにあげられる。完成したばかりのピアノを仕上げるために、同時代に開発されたヨーロッパ製の黒色塗料を選んだと考えることは、それほど無理な発想ではあるまい。ピアノを黒一色で仕上げること、まさに漆黒の塗料の開発こそが、ヨーロッパ人の求めたステータスのひとつであった。永い時間をかけて開発した黒い塗料に包まれたピアノこそが完成した姿だったわけである。

ヨーロッパにおける日本の漆器の受容の要因が、蒔絵や螺鈿などの東洋的な装飾だけにあったのではなく、漆が黒い塗料であったと考えたのは以上のような理由によるものである。

## 謝 辞

本稿をまとめるにあたって、東京国立博物館学芸部企画課 後藤文子研究員のご協力をいただきました。後藤文子氏の卓越した翻訳にこころから感謝いたします。

## 引用文献等

- 1) "Braunschweiger Lackkunst", Städtisches Museum Braunschweig/Miszellen, 1997.
- 2) ジャパニングとは、ヨーロッパラッカーを使って漆器風の家具を製作すること。17世紀はじめにすでに始まり、1688年にはオックスフォードからジョン・ストーカーとジョージ・パーカーによって『A Treatise Japaning and Varnishing』というテキストも出版されている。18世紀初頭にベルリンのシャルロッテンブルグ宮殿で活躍した家具親方のゲルハルト・ダグリー (Dagly Grhard 1687~1714) によって行われたジャパニングは特に有名で、現在も宮殿内を飾る日本製のキャビネットの脚や彼自身が製作したキャビネットなどが伝わっている。そのほか、ドレスデン郊外のピルニッツ城にもジャパニングの作例がある。これらの作品については、1998年11月~12月にかけてミュンスター塗物博物館がおこなった特別展で展示され、モニカ・コップリン氏によって『Sachssisch Lacquirte Sachen』としてまとめられている。
- 3) "A Treatise Japaning and Varnishing", Oxford by John Stalker and George Parker, 1688.

## Japanese *Urushi ware* Abroad

Hiroshi KATO

From the second half of the 16th century all kinds of Japanese *urushiware* was exported to Europe to be used in palaces and the like. There are three groups: European style furniture; *urushi* furniture not in European style; and the 18th century Chinese style *urushiware* which was exported from China. The surfaces of these lacquered objects were decorated with flower patterns in gold and silver *makie*, *raden* and other materials. Nowadays the research of the decoration categories of exported lacquer is advancing in both Europe and Japan. The perspective of this paper is to examine the decoration of these exported *urushiware* from a different point of view, that is to find the reason why Europeans imported so much Japanese *urushiware* then.

During the 17th and 18th century, Europeans used lacquer materials like copal and sandarac. These lacquers were transparent and almost colorless. Copal, a kind of fossilized resin found in the ground, is melted and dissolved in oil. Braunschweig is one of the places where they used oilcopal varnishes and various lacquered objects were produced there.

Especially Johann Heinrich Stobwasser, in 1757, discovered a black paint and used it for snuff boxes. There were several steps used for his special technique.

- A Fossilized resin was melted by heating until 360 °C and then dissolved in linseed oil.
- B The object's body was made of papier mâché and coated 30 times with the oil copal varnish.
- C Then the objects were heated until 100°C in a stone oven for several hours. The transparent paint turned pitch black.

Far Eastern furniture became popular in Europe and from the 16th century Europeans started importing ebony from Madagascar. Black wooden furniture was decorated with stained glass and *pietre dure*. But this kind of furniture had several problems. Ebony was very hard and special skills were needed to work with it and furniture manufacturers needed to invite craftsman from India. The cabinets were also very heavy and not easy to move.

Why did Europeans choose ebony as a material? Maybe because the color black they got in Europe at that time was not the black we have in *urushi*, raven-black. Later hornblack and boneblack were used to give a better result but only ivoryblack gave a pitch black color. Around this time they also started to import black *urushiware* from the Far East. The lacquered furniture was lighter and more comfortable to use. Johann Stobwasser was famous in this period because he also produced nearly perfect black lacquerware.

In my opinion, the reason why European people chose Japanese *urushiware* is not only they liked to use gold and silver *makie* and *raden* but also they loved to use *urushi* which was truly black.